

第1章 調査の経過

1. 調査の目的

遺跡の概要

網野銚子山古墳は京都府京丹後市網野町網野に所在する。日本海に面し、福田川河口域の網野町市街地を見下ろす台地上に立地する。日本海沿岸部最大の前方後円墳であり、本古墳が築造された4世紀後半は丹後地方に有力な政治勢力があったという、いわゆる「丹後王国論」を象徴する遺跡の一つである。

網野銚子山古墳は大正11年3月8日に周辺に立地する2基の古墳（第一、第二古墳）と共に国の史跡に指定された。平成23年9月21日に周溝部分が追加指定され、現在の指定面積は37,743.23㎡である。なお、本古墳の指定名称は「銚子山古墳」であるが、本市弥栄町黒部には京都府指定史跡「黒部銚子山古墳」が所在し、混同を避けるため遺跡地図等では「網野銚子山古墳」と通称している。

調査に至る経過

網野銚子山古墳周辺では、昭和50年代から近隣農地のほ場整備が計画され、順次実施されていった。その事前調査として、昭和60年～61年に初めて発掘調査が行われ、墳丘斜面の葺石、テラス部の埴輪列、周溝が確認された。

その成果を受け、網野銚子山古墳整備の機運が徐々に高まり、平成7年、日本ナショナルトラストが「網野創世の丘」構想を提案した。この構想は幾度かの検討を経て、平成16年3月網野町教育委員会により『銚子山古墳周辺整備基本構想』として纏められた。

平成16年4月の京丹後市発足後、京丹後市教育委員会では平成19～21年度に範囲確認調査を実施し、古墳の適正な保存と活用を図るべき範囲として古墳築造時の造作範囲を確定した。その成果を得て平成23年には国史跡の追加指定を受けた。そして同年『史跡銚子山古墳整備基本計画』を策定した。さらに平成24～26年に指定地の公有地化を進め、現在では指定地の約85%が市有地となった。『基本計画』では6つの整備目標を掲げ、それに沿った当面の整備内容を示した。これらを実施するために平成27年から29年まで墳丘の復元を行うための基礎資料を得るための範囲確認調査を実施したところである。

調査の目的

これらの発掘調査の結果を受け、事業年度ごとに実施設計を作成し整備事業を遂行しているが、実施設計を行う中で設計内容に対し現状変更を行うための状況確認が必要となる事案がいくつか発生した。具体的には、墳丘前端部に設計された墳丘復元盛土、後円部に設計された階段施設、くびれ部付近に設計された遺構の一部復元の3点であった。これらの工事を実施するにあたり、事前に遺構の残存状況を確認し実施を判断する必要があるため、設計予定場所の発掘調査を行い状況確認に努めた。本報告書は平成29年度から令和2年度まで行われたこの発掘調査について報告するものである。

2 調査体制

発掘調査を含む整備事業の推進については、京丹後市史跡整備検討委員会を組織し、その指導を得ながら実施した。委員会は京丹後市史跡整備検討委員会条例に基づき設置し、外部有識者、地元関係者などで構成している。（継続中）

委員会及び開催経過、調査体制は以下のとおりである。（平成29～令和2年度発掘調査実施時・敬称略）

京丹後市史跡整備検討委員会（肩書は平成29～令和2年度当時）

- 委員長 三浦 到（元京丹後市立資料館長）
副委員長 杉原和雄（元大阪国際大学教授）
副委員長 富澤孝雄（京丹後市文化財保護審議会会長・～H30.5）
副委員長 藤田泰弘（京丹後市文化財保護審議会会長・H30.6～）
委員 高瀬要一（元奈良文化財研究所）
委員 福永伸哉（大阪大学教授・～R1.5）
委員 岸本直文（大阪市立大学教授）
委員 澤 吉博（京丹後市文化財保護審議会委員）
委員 宇野貞夫（網野町郷土文化保存会会長）
委員 沖佐々木義久（網野連合区長）
委員 小森理一（御陵区長・～R2.3）
委員 山下弘貴（御陵区長・R2.4～）
委員 吉野文夫（長田区長・～R2.3）
委員 毛呂敏弘（長田区長・R2.4～）
委員 増田庄吾（京丹後市立資料館長）
委員 横島勝則（京丹後市教育委員会教育次長）

アドバイザー 京都府教育庁指導部文化財保護課

発掘調査・整理作業体制（平成29年～令和5年度）

[平成29年度]

調査担当部局：京丹後市教育委員会文化財保護課

文化財保護課課長 吉田 誠

文化財保護課課長補佐 岩崎浩一

文化財保護課係長 岡林峰夫（調査担当）

（調査参加者）

調査補助員 松田雅美、奥田栄吉、瀬古諒子、（調査参加者）

[平成30年度]

文化財保護課課長 吉田 誠

文化財保護課課長補佐 新谷勝行

文化財保護課係長 岡林峰夫（調査担当）

文化財保護課主事 藤田智子（調査担当）

文化財保護課主事 奥 勇介（調査担当）

第1章 調査の経過「2. 調査体制」

松本俊和	調査補助員 松田雅美、奥田栄吉、瀬古諒子
作業員 堀江幸次郎、安井環、山本雄、地部博昭（京丹後市総合サービス株式会社派遣）	作業員 地部博昭、近藤八十二、河端和美、岩崎光枝、芦田幸夫、吉岡忠秋、金森弘夫、梅田洋子（京丹後市総合サービス株式会社派遣）
[令和元年度]	[令和2年度]
文化財保護課課長 新谷勝行	文化財保護課課長 新谷勝行
文化財保護課係長 岡林峰夫（調査担当）	文化財保護課係長 岡林峰夫
文化財保護課主事 藤田智子（調査担当）	文化財保護課主任 藤田智子（調査担当）
文化財保護課主事 奥 勇介（調査担当）	（調査参加者）
（調査参加者）	調査補助員 奥田栄吉、瀬古諒子、岩崎光枝
調査補助員 松田雅美、奥田栄吉、瀬古諒子、岩崎光枝	整理員 森本須都子
作業員 山本雄、地部博昭、芦田幸夫、吉岡忠秋、神者榮（京丹後市総合サービス株式会社派遣）	
[令和3年度：整理作業]	[令和4年度：整理作業]
文化財保護課課長 新谷勝行	文化財保護課課長 新谷勝行
文化財保護課係長 岡林峰夫	文化財保護課係長 岡林峰夫
文化財保護課主任 藤田智子（整理担当）	文化財保護課主任 藤田智子（整理担当）
（調査参加者）	（調査参加者）
調査補助員 奥田栄吉、岩崎光枝	調査補助員 奥田栄吉、岩崎光枝、水川慶紀、榊原悠介、吉永健人、山本実慶
整理員 森本須都子、磯田典子、山本優	
[令和5年度]	
調査担当部局：京丹後市教育委員会文化財保存活用課（R5.4～課名変更）	
文化財保存活用課課長 村田雅之	
文化財保存活用課課長補佐 岡林峰夫	
文化財保存活用課主任 藤田智子（整理担当）	
（調査参加者）	
調査補助員 奥田栄吉、小笠原順子	

3 位置と環境

京丹後市の地理的・歴史的環境

京丹後市は、京都府の北部、日本海に面する丹後半島の大部分を占める地域である。海に面する北以外の三方は山に囲まれており、市域の北東端から南西にかけて、市境に太鼓山、金剛童子山、高尾山、磯砂山、高龍寺ヶ岳など 600 m級の丹後山地が連なり、市境をなしている。その森林面積は市域の約 75%を占め、山がちの地勢を持つ地域である。丹後山地から流れる河川は、竹野川、福田川、佐濃谷川、川上谷川などが南から北に流れ、日本海に流入し、中下流域に小規模な沖積平野を形成している。また、丹後半島の地形の特徴として、久美浜湾などの潟湖（ラグーン）が発達していることがあげられる。また、河川堆積作用により現在は消滅しているが、竹野川および福田川河口域などもかつては潟湖を形成していたことが判明している。

京丹後市の遺跡分布状況は、これら潟湖につながる河川の河川段丘上および河川を望む低丘陵・山地に中心がある。人々は河川流域に定住し、潟湖から各河川を通じて内陸へ文化の伝播や物流が行われていたものと推定することができる。

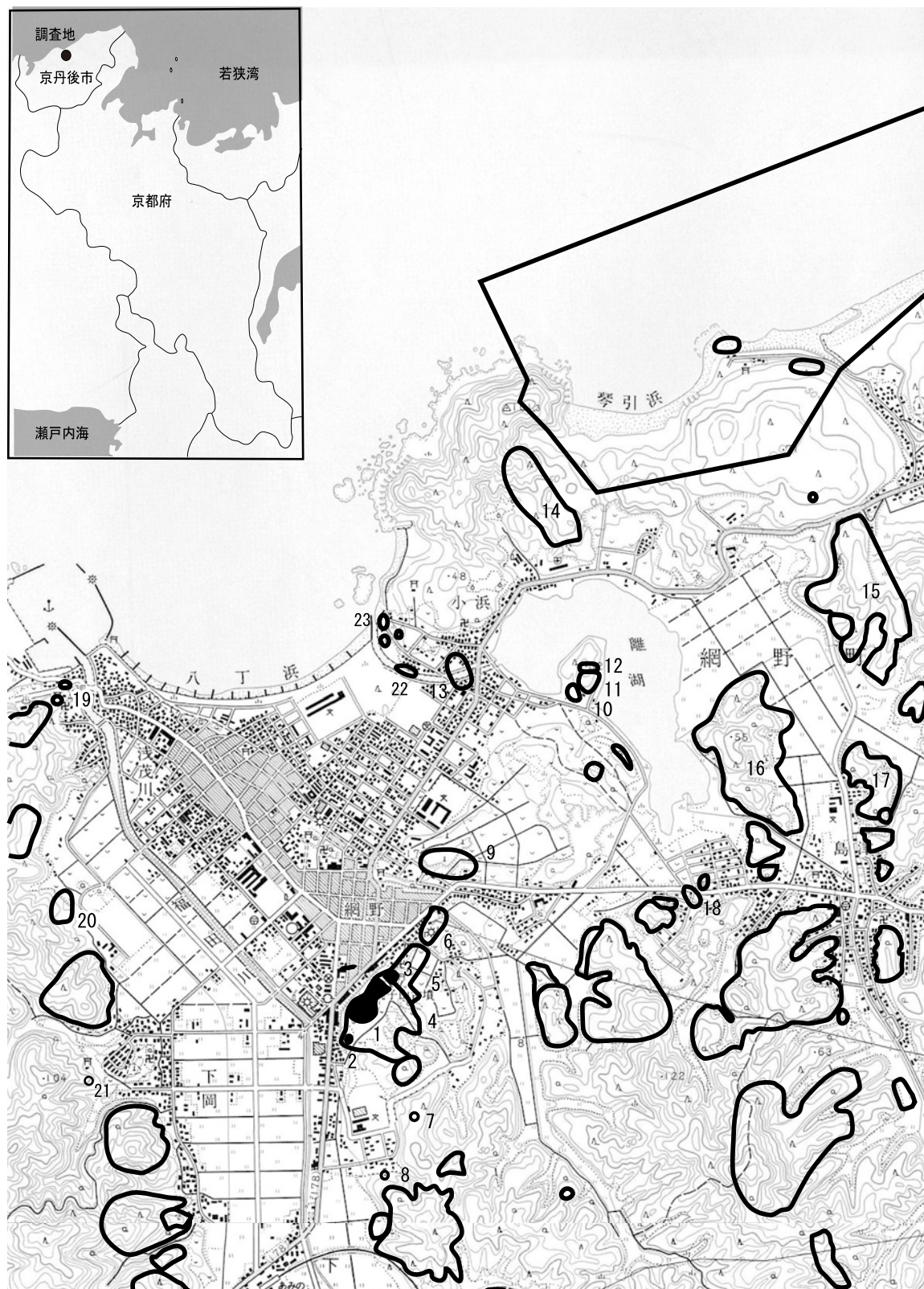
市域では、日本海を望む海岸段丘上に展開する丹後町上野遺跡から後期旧石器時代の台形石器、鋸歯縁石器、抉入石器などが出土し、約三万六千年前には人類の営みがあったことが推定される。縄文時代には、海岸部および河川の上流部に集落遺跡等が点在する。丹後町平遺跡や網野町浜詰遺跡、大宮町裏陰遺跡などが著名なものであり、平遺跡で出土した縄文時代中期末葉～後期初頭の土器は「平式土器」として日本海沿岸の各地で確認され、当時の交流を示すものとして位置づけられている。

弥生時代になると、竹野川流域では峰山町途中ヶ丘遺跡・丹後町竹野遺跡など河川や海を望む微高地に拠点集落が築かれ、中流域では峰山町扇谷遺跡に代表される高地性集落が営まれるようになる。また、弥栄町奈具岡遺跡のように首飾りなどに使用される各種玉類を製作した専門的な生産遺跡が存在し、遠隔地との交易のための貴重材を生産していたと考えられている。その見返りとして国内外から入手したガラス・鉄などの貴重品が首長の威信材として使用され、墳墓に副葬される。大宮町三坂神社墳墓群などが代表例として挙げられる。後期後半になると墳墓は大型化し、峰山町赤坂今井墳墓では国内最大級の規模の墳丘が築かれ、中国の顔料「漢青」を使用した頭飾りが副葬されている。

古墳時代には、河川を望む丘陵上に多くの古墳が築かれる。しかし、多くは細く伸びる丘陵の自然地形を利用して築かれるため、墳丘長 20 m以下のものがほとんどであり、墳丘長 40 mを超えるものは 20 基に満たない。しかし、その中で古墳時代前期末葉～中期初頭に築かれた網野銚子山古墳と丹後町神明山古墳は墳丘長 200 m級と卓越した規模を持ち、与謝野町蛭子山古墳と合わせて日本海三大古墳と呼ばれ、その築造をめぐる多くの課題を投げかけている。

網野銚子山古墳周辺の地理的・歴史的環境

網野銚子山古墳の立地する場所は、市内の北部、網野町を縦貫し日本海に注ぐ福田川の河口域にあたる。古墳周辺での平野は福田川流域に限られ、市街地はここに展開している。また、市街



- | | | |
|-------------------|----------------|------------------|
| 1 網野銚子山古墳 (銚子山古墳) | 2 小銚子古墳 (第一古墳) | 3 寛平法皇陵古墳 (第二古墳) |
| 4 三宅遺跡 | 5 林遺跡 | 6 大將軍遺跡 |
| 7 妹古墳 | 8 勝山古墳 | 9 新浜古墳群 |
| 10 離遺跡 | 11 離湖古墳 | 12 離山古墳 |
| 13 岡古墳群 | 14 城山古墳群 | 15 大谷古墳群 |
| 16 谷崎古墳群 | 17 島津遠所古墳群 | 18 くらがり古墳群 |
| 19 水落古墳 | 20 二村古墳群 | |
| 21 椎木谷古墳 | 22 宮ノ下遺跡 | 23 新樋越川河床遺跡 |

第 1-1 図 位置図・周辺遺跡分布図

地の北東部には京都府下最大の淡水湖である離湖が存在する。

福田川の河口にはかつて潟湖が存在し、市街地の平野部はその名残りともみられる。旧潟湖の両側には丘陵が迫っており、その間に潟湖と日本海とを隔てる砂嘴が形成されていたと考えられる。

網野銚子山古墳は、この旧潟湖一帯の南側に位置する台地上にあり、築造当時は、古墳から潟湖を眼下に見下ろしていた。一方、海上からは、両側に丘陵が迫り、その間に形成された砂嘴そして潟湖の向こう側の台地先端に巨大前方後円墳を横向きに望むこととなる。明らかに古墳からの眺望、また海上からの眺望ともに計算された立地条件を備えているものと考えられる。

古墳周辺の遺跡として最も古いものは、縄文時代早期の宮ノ下遺跡である。ここからは楕円押型文や条痕文の深鉢などが出土し、海岸線沿いの平地に集落が存在していたことを想起させる。その南に位置する新樋越川河床遺跡では、新樋越川護岸工事の際に縄文土器などが出土し包蔵地として認識されている。

弥生時代になると、福田川河口を望む台地や海辺周辺に集落が営まれた。離湖に突き出す離山の基部に位置する離遺跡は、ヘラ描直線文の壺など弥生時代前期の土器から複合口縁を持つ弥生時代後期の土器まで複数の時期の遺物が出土し、顕著な遺構は検出されていないものの集落跡と考えられている。また、網野銚子山古墳に程近い林遺跡では弥生時代後期の円形住居跡3基が検出され、古墳の立地する台地上が古墳築造よりも前から人による利用がなされていたことを示している。さらに、古墳に隣接する三宅遺跡でも、遺構は検出されなかったが弥生時代後期の土器が出土している。この2つの遺跡は隣接地の上、出土土器の傾向も似通っているため、一つの集落であるという指摘もある。

墳墓では、福田川中流域の丘陵先端部に位置する弥生時代後期に築造された浅後谷南墳墓がある。本墳墓は、丹後地域に多く見られる地山整形の小規模墳の系譜から発達したものと見られ、鉄剣・ガラス製品の出土が特筆される。さらに浅後谷南墳墓の南から小さな分水嶺を越え竹野川中流域の中郡盆地へ向かう細い谷筋の丘陵上には弥生時代後期の国内最大級の大型墳墓である赤坂今井墳墓が所在し、福田川流域から峰山・中郡盆地へ至るルートがこの時期に主要ルートとして盛んに利用されていたことがうかがわれる。

古墳時代では、網野銚子山古墳を最大規模とする。それに続く規模の古墳は古墳時代中期の離湖古墳（約40 m）であり、規模の隔絶がある。古墳時代後期は離湖周辺に竪穴系横口式石室を持つ離山古墳、横穴式石室を持つ岡1号墳が続くが、単独墳もしくは数基単位の小規模な古墳群で構成される。

集落の動向は不明な点が多い。福田川中流域では、弥生時代後期から平安時代にかけて存続した浅後谷南遺跡がある。丘陵裾の段丘状地形に位置し、古墳時代の水祭祀施設とみられる導水施設や祭礼用木器として利用された木製品などが出土している。また、網野銚子山古墳の北東約300 mの丘陵上に所在する大將軍遺跡では、土壌から網野銚子山古墳・小銚子古墳に樹立されたものと同じ特徴をもつ埴輪片が出土している。同じ土壌からは、蓋形埴輪片、土師器片などが出土しており、網野銚子山古墳の築造年代を考える上で指標とされている。